

地方創生で、長万部ブランドを発信する。――

少子高齢化・人口減少を打開する切り札として期待される地方創生。中でも全国から注目を集めているのが、長万部町と東京理科大学が協力して推進している先進的アグリビジネスのプロジェクトだ。ブランド化に成功し、雇用創出も成し遂げた当町の地方創生の姿を紹介したい。

地方創生とは？

平成26（2014）年5月、「2040年までに896の自治体が消滅する可能性」を明らかにした日本創生会議による発表は、日本中に大きな衝撃をもたらした。少子高齢化の進行が行き着く先にある危機が現実のものとして捉えられたのである。

同年9月、政府は「まち・ひと・しごと創生本部」を設置し、「地方創生」を政策としてスタートさせた。各地方自治体が将来の人口推計を踏まえ、地方版総合戦略を立案、その取り組みに国が各種の支援を行い、地域の活性化を目指すという事業である。こうして、全国各地地方創生のプロジェクトが推進されることとなった。

長万部町もかつて昭和40（1965）年のピーク時には約1万6000人の人口があったものの、平成27年には5926

人（国勢調査）で、さらに国立社会保障・人口問題研究所によると令和27（2045）年には2750人と、半減以下と推計されていた。



理科大と協力、先進技術を用いた植物工場のプロジェクト発進

長万部町の地方創生プロジェクトのきっかけは、平成27（2015）年9月に開催した「長万部地方創生サミット」であり、ここで「長万部町と東京理科大学との地方創生に係る包括的連携協定」を締結



長万部ブランド「ENRICH MINI TOMATO」

先進的アグリビジネスモデルの枠組みでトマト栽培を事業化、成功させるためには、付加価値が必要となる。

平成29（2017）年9月、地方創生コンソーシアムを法人化し、長万部町の地方創生活動全般を担う組織として、一般社団法人北海道おしゃまんべ、11月には先進的農業に関する事業会社として長万部アグリ（株）を設立し、事業を実施する基本的な枠組みを整備した。

平成30年、トマトハウスが本格稼働。（株）プラントライフシステムズが開発した栽培システム「トマトのKIBUN」を活用した循環型水耕栽培を実施している。これは一般的なトマト栽培と

異なり、水を絞ることなく、アルカリ培地の下で味の濃い美味しいトマトを生産する新しい農法だ。

さらに、長万部の特産であるホタテ貝殻を町内工場で焼成したものなど、天然の炭酸カルシウム培地を土の代わりに使用する。強いアルカリ性が作用し、甘さと栄養を生み出す。

こうして開発されたミニトマトは「ENRICH MINI TOMATO」と命名された。「人々を豊かにするトマト」という意味を込めた。試験栽培を経て、ハウスの1棟目を建設し、量産体制を構築し、首都圏に向けて営業活動を活性化させた。同年、2棟目のハウスを自主財源により完成させるなど、生産体制を拡大させた。

一方、再生可能エネルギーの活用については、平成30年度から太陽光発電を、さらに令和元（2019）年秋からは蓄電池も導入し、作業場電力に活用した。また、令和2年初頭には、町の温泉熱を利用し、熱交換を通じて温めた真水をビニールハウスに循環させる設備を導入し、光熱費のコスト削減に努めることとした。都内や札幌でのイベント出品や営業活動を行うことで、百貨店やレストランをはじめ取扱店は徐々に増えていった。また、平成30年度からは、長万部町のふるさと納税返礼品にも採用。さらにENRICH MINI TOMATO 100%でつくったジュースも開発した。



01. エンリッチミニトマト

02. トマトハウス（長万部アグリ（株））

03. ハウスでの栽培風景

04. 地方創生サミット（中央：石破地方創生大臣）

05. 長万部小学校の給食に寄贈（令和5年）

ENRICH MINI TOMATOはその美味しさが評価され、令和2年2月、格付けジャパン研究機構の総合評価で、データプレミアムNO.1格付け認証を受賞した。また、ジュースは令和5年2月、味や品質管理に優れた道産加工品を認定する「北のハイグレード食品2023」（道主催）にも認定されるなど、すっかり長万部町の特産品として定着し、さらなる飛躍が期待されている。

したことだった。翌月の「長万部町人口ビジョン」「長万部町創生総合戦略」策定を経て、町は東京理科大学（以下、理科大）と協力し、「東京理科大学、長万部町、事業コンソーシアム」の連携による再生可能エネルギーを活用した先進的アグリビジネスプロジェクトを発進させた。観光業や農業などのリソースを持つ長万部町と応用生物・応用科学・情報工学などさまざまな研究成果を持つ理科大が協力し、地域活性化を目指すものである。このように大学と町が協力して地方創生プロジェクトを実施するのは極めて珍しい。このプロジェクトは内閣府から平成27年11月に地方創生先行型交付金、翌4月に地方創生加速化交付金、さらに29年度から令和元（2019）年度まで地方創生推進交付金に採択された。プロジェクトでは、理科大の事業会社である東京理科大学インベストメント・マネジメント（株）と町・事業に協力する企業などで事業コンソーシアムを構成し、再生可能エネルギーなど先進技術を用いた植物工場による野菜生産を行うこととした。

プロジェクトでは、長万部町内に試験

多様な連携・協力を築いた歴史と国際デザイン経営学科の発進。――

令和5年4月、東京理科大学北海道・長万部キャンパスに、4年ぶりに学生が戻ってきた。経営学部国際デザイン経営学科1年生の約130人。昭和62年に同キャンパスが開校されてから36年。町と大学の関わりを振り返るとともに、新たな時代の幕開けを見よう。

長万部は第2の故郷

昭和40年代をピークに北海道の鉄道輸送が急速に縮小し、鉄道の町として発展してきた長万部町は軌道修正を迫られ、西田君雄町長（当時）は、まちづくりの長期展望、企業誘致などを模索し始めていた。

同じころ、東京理科大学（以下、理科大）では「自然を尊重する豊かな人間性と国際感覚を身につけた21世紀を担う技術者の養成」を目指し、その適地を探していた。理科大のある理事が、偶然長万部に立ち寄る機会があり、西田町長と面会。理科大の構想や当町の過疎化という課題が話題になった。両者ともに「理科大の構想に自然豊かな長万部が適するのではないか」と考えたのだ。

この出会いを機に西田町長と理科大との協議が始まり、数



01

教育・文化・産業など多彩な連携

町と理科大の関わりは年を経るごとに深まった。長万部町の教育やまちづくりに関わる委員会の多くに大学の教職員が学識経験者として参画し、地域に貢献している。近年では、毛ガニの完全養殖に向けた研究も進められている。

平成3（1991）年から29年度まで、数学者の榎本一之先生と学生有志による数学学習サークル「ピタゴラス」が、榎本先生の退官まで続けられた。小学生から高校生まで参加し、町内の多くの子どもが数学の楽しさを教わった。平成13年から令和元（2019）年度まで、大学生と町民が音楽を通じて交流を図る「ハートフルコンサート」を長万部キャンパスエソール会館で行った。

平成19年度から、外国人英語教員が町の小中学校に派遣され英語の授業を行った。22年度には、長万部高校1年生



03



04

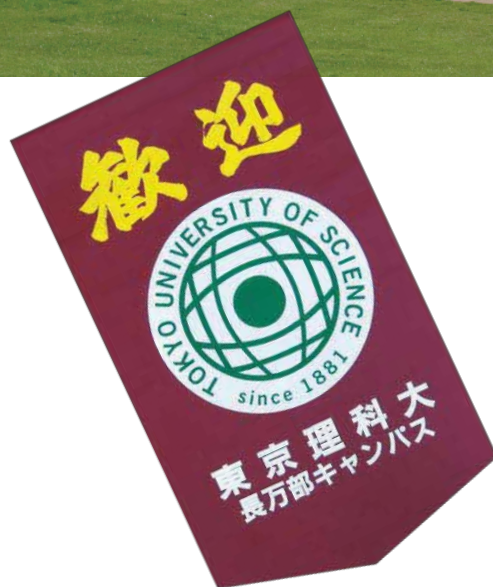
を対象に高大連携・体験模擬授業を実施。23年には、町教育委員会主催で町内小学生（3～6年）を対象に「わくわく体験塾おもしろ科学実験」を長万部キャンパスで開催、講師を務めたのは大学生10数人であった。24年には、長万部キャンパスが企画した町民向けの「プラウン先生とお茶をしながら英会話」がスタート。

平成28年、長万部キャンパスが開設30周年を迎え、8月中の4日にわたって記念イベントが行われた。30年間の歴史を振り返るとともに、進行中の地方創生に向けて「長万部地方創生サミット」も開催された。石破茂地方創生大臣が参加し、地方創生のあり方について講演するとともに、理科大の関連会社から町の資源を活用する新型アグリビジネス構想が発表された。サミットでは、「長万部町と東京理科大学との地方創生に係る包括的連携協定」の調印式も行われた。

年に及ぶ現地調査の末、昭和60（1985）年、長万部キャンパスの開設が決定した。

昭和62年4月、新設の基礎工学部1年生277人を真新しい長万部キャンパスに迎えた。学生たちは1年間を全寮制で生活しながら長万部で過ごす。町では寮で使用する温泉を掘削し、入寮にあたっては、花火を打ち上げ、商店街を歓迎塔や看板、ステッカー、ちょうちんで飾り、大勢で歓迎した。入寮式典終了後には、農協や町商工会が中心になって長万部産のホタテやジャガイモ、搾りたての牛乳でもてなした。

ある1期生は「都会では体験できないすばらしいことを数多く体験し、学んだ。その一つに、町の人々との交流があった。



05

4年ぶりに長万部キャンパスが再開

理科大における学部・学科の再編に伴い、令和3（2021）年度から長万部キャンパスは名称を北海道・長万部キャンパスとして、基礎工学部に代わって経営学部国際デザイン経営学科1年生（定員120人）、令和4年度から理工学部国際コースの留学生80人に加え、合計で200人が全寮生活を送る予定であった。

しかし、令和2年春、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、理科大は長万部町での新入生受け入れを見送った。コロナ禍は長引き、令和3年、4年も町で新入生を迎えることはかなわなかった。また、令和3年、理工学部国際コースの長万部キャンパスへの設置は取りやめとなり、留学生を迎える計画は中止された。こうした苦渋の決断の中にあっても、大学では老朽化した学生寮を改修するなど、着々と準備を進めた。

令和5年4月、長万部キャンパスが4年ぶりに再開され、132人の経営学部



02

我々は大学や町が主催した行事のほとんどすべてに参加した。そしてその都度町の人々と親睦を深めていった。写万岳登山、産業まつり、農作業、学寮祭など、その他いろいろな行事で接した町の人々は、明るく、親切で、心よく我々を受け入れてくれた」（「SPES NOVA」新しい希望）と書く。学生たちは、当町最大のイベント「おしゃまんべ毛がにまつり」の運営にもボランティア参加する。1年の最後には、「理科大生を送るつどい」を催し、ともに別れを惜しんだ。長万部での生活を終える際の学生アンケートには例年9割以上が満足と回答するなど、キャンパスとしての存在価値も高まった。

国際デザイン経営学科1年生が入寮した。同学科は、「デザイン表現のスキル」「デジタル技術の基礎知識」「異文化への対応力」の3つを柱にしてインベシヨン人材の育成を目指す。町のよりよい未来を構想する「コ・デザインプロジェクト」なども行われることとなり、キャンパスから街中へ出て、町民と交流し地域活動などを企画する学生たちの姿が見られ始めている。

これから始まる町と理科大の新たな連携が期待される。



06



07

- 01. 東京理科大学北海道・長万部キャンパス
- 02. シャクシャイン古戦場跡碑の見学
- 03. 第1回目のわくわく体験塾（平成23年）
- 04. 包括的連携協定調印式（平成27年）

- 05. まんべ君の授業風景
- 06. コ・デザインプロジェクトの成果発表
- 07. 理科大生来町の日（令和5年）